

ナイルの至宝、古代エジプト文明の遺跡を訪ねて①

2017年7月6日

萩原 卓

今年1月末から2月に訪れたエジプトの旅。改めて振り返ってみたい。今回の2週間のエジプトの旅では、ルクソール、カイロ、サッカラ、アレクサンドリア、アブー・メナー、アスワン、アブ・シンベルなど、実に上エジプトから下エジプトまで様々な古代遺跡を巡ることができた。少人数だったこともあり、スケジュールは柔軟で、現地のガイドの方も上手な日本語で説明してくれ、大変ありがたかった。

加えてヒエログリフや古代エジプト壁画の研究をされている村治笙子先生、日本オリエント学会会員の磯部信行先生も参加され、周囲は先生ばかりで、どんな疑問にも答えていただき、この上ない充実した旅となった。

(日程)

- 1月29日 成田 → ルクソール 泊
- 30日 デンデラ神殿複合体 ⇒ ルクソール神殿
- 31日 ハブ神殿(ラメセス三世葬祭殿) ⇒ 貴族の墓 ⇒ 職人の町 ⇒ カルナク神殿
- 2月 1日 王家の谷 ⇒ 王妃の谷 ⇒ ルクソール博物館
- 2日 カイロへ エジプト考古学博物館
- 3日 ギザの三大ピラミッド ⇒ 太陽の船博物館 ⇒ カフラーの河岸神殿 ⇒ スフィンクス ⇒ ピラミッドパノラマ(乗馬)
- 4日 サッカラへ イムホテプ博物館 ⇒ ジョセル王の階段ピラミッド ⇒ ウナス王のピラミッド内部 ⇒ マスタバ墓 ⇒ セラペウム(聖牛アピスの石棺) ⇒ 赤のピラミッド内部
- 5日 アレクサンドリアへ カタコンベのお墓 ⇒ ポンペイの柱 ⇒ アレクサンドリア図書館、博物館
- 6日 アブー・メナーへ ⇒ 修道院および保全、修復中の遺跡
- 7日 アスワンへ ⇒ イシス神殿、⇒ アブ・シンベルへ アブ・シンベル神殿
- 8日 朝日のアブ・シンベル神殿 ⇒ アスワンへ ダハベイヤにチェックイン ～～ 夕刻のコム・オンボ神殿
- 9日 ガバルエルセルセラ(石切り場) ～～ エドフ神殿
- 10日 エルカーブ 貴族の岩窟墓
- 11日 ダハベイヤからルクソール空港 ⇒ カイロへ
- 12日 カイロ → 成田

(1月29日)

昨年から、成田からルクソールへのチャーター便が運航されるようになった。直行便は有難い。エジプト航空旅客機の機体には、天空の神「ホルス神」がデザインされている。機内誌も「HORUS」だ。



ルクソールには、夜の10時30分頃到着。現地では、村治先生のほかマフムードさんと、ガイドをお願いする日本語が上手なムハンマドさんに出迎えていただいた。早速「ソネスタ・セント・ジョーズホテル」に向かう。立派なホテルだ。

(1月30日)

最初はデンデラへ。ここには、ハトホル神殿を中心とした複合体がある。ローマ時代の誕生殿やコプト教会、サナトリウムや聖なる池、そして中心にはハトホル神殿がある。プトレマイオス時代末期の建造物やローマ時代に建造したものが残っているという。周囲にはマスタバ壁が残っているが一部は崩れかかっていた。



まず北門をくぐる。上部の横石には、スカラベが描かれている。「スカラベが下から描かれているのは珍しい。」と村治先生。確かに足まではっきり見える。

中に入っていくと、ローマ時代の誕生殿、コプト教会などが右手に並んでいる。それらを見学して、ハトホル神殿に向かう。



ハトホル神殿は、巨大な建造物だった。ハトホル（Hathor）は、古代エジプト神話の、愛と美と豊穡と幸運の女神。聖獣は牝牛だ。

まず、大列柱室がある。18本の大きな円柱が立ち、その上部四面にハトホルの顔が彫られていた。思わず見上げてきょろきょろと見回した。



また、奥の天井画にはヌト女神の姿が描かれていた。

ヌト女神は天の神で、夜に太陽を飲み込み、翌朝太陽を生み出すと考えられていたという。



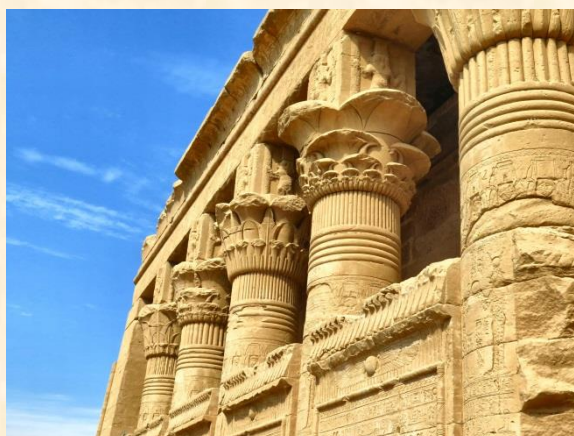
その後最奥部の至聖所などを見学した後、屋上にある小祠堂の天井にある「デンデラの黄道帯」と呼ばれるレリーフを見る。解説ではおうし座やてんびん座などが描かれているという。天文学的配置からも正しいことが分かっているという。残念ながらオリジナルは、ルーヴル美術館にあり、ここには複製がある。そして狭い入口を降りると地下室があり、「デンデラの電球」と呼ばれるレリーフがある。本当に電球がこの当時存在したのか議論があるようだが、なかなか興味深かった。

エジプトは、第26王朝を最後に、前525年頃アケメネス朝ペルシャの支配下にはいるが、その後、マケドニアのアレクサンドロス大王がペルシャ軍を駆逐し、マケドニアの属国となる。

しかし、大王の死後遺産分割のような形で、将軍プトレマイオスにエジプトの統治権が譲られ、ここにプトレマイオス朝が始まることとなる。

彼らの統治は、エジプトの伝統を受け継ぎ、神殿の建設や美術も伝統的な様式で制作されている。一方でギリシャ美術の影響も随所にみられる。

ハトホル神殿の列柱の柱頭部分の彫刻もギリシャ風のものが見られる。



また、神殿の壁に見られるクレオパトラ7世のレリーフは、プトレマイオス朝のエジプト芸術を表わしていて、クレオパトラと彼女の息子カエサリオンが描かれている。



ここで説明を聞いて、見学を続けているとあっという間に4時間が過ぎてしまった。

昼食は、ローカルレストランで済ませて、ルクソール神殿に向かう。



町の中心部にあるこの神殿は、古代エジプト時代の神殿複合体で、カルナク神殿の中心を形成するアメン大神殿の付属神殿としてアメンヘテプ3世によって建立されたとのこと。紀元前1390年から1350年頃になる。

こんな古い時代に、このような立派な神殿があったとは、驚くばかりだ。

神殿入口となる第1塔門の前には1対のラメセス2世の坐像があり、その手前にはオベリスクが1本立っている。もともとオベリスクは本来左右2本あったが、右側の1本はフランスに贈られ、現在コンコルド広場にある。

ラメセス2世の坐像のサイド側には、パピルスとロータスを結び合って引っ張るファラオが描かれている。上下エジプトの統一を表現しているようだ。第1塔門から入りラメセス2世の中庭、列柱廊、アメンヘテプ3世の中庭へと続く。

途中、ドーム型の窪みがあり、コプト教の宗教画が見られた。教会の名残が残っているようだ。そしてラメセス2世の像、大列柱廊のツタンカーメンと妻の像、また壁には「オペトの祭り」というエジプト年一回の祭りの様子も描かれていた。

午後遅くに到着したため、その後だんだん暗くなり、ライトアップされた神殿が浮かび上がってくる。遠くに月が見える。何かテーマパークのようだが違う。本物だ。



神殿を出る頃には、すっかり暗くなっていた。両脇にスフィンクスが並んでいるのが、とても神秘的だった。



明日は、貴族の墓、職人の町、カルナク神殿を訪れる。

